



喜びを音楽とともに：
旭川における障害児への音楽運動療法導入の試み

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-07-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古川, 宇一, 寺田, 真澄, 西崎, 広美, 青野, 栄, 野田, 燎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00008042

喜びを音楽とともに

旭川における障害児への音楽運動療法導入の試み

Fun with Music: Introducing Music Movement Therapy for Children with Handicapped at Asahikawa

古川宇一(Uichi Furukawa)* 寺田真澄(Masumi Terada)** 西崎広美(Hiromi Nishizaki)**

青野 栄(Sakae Aono)** 野田 燎(Ryo Noda)***

音楽、すなわち「音の楽しみ」には、治療的・教育的・保健的機能がある。旭川では音楽運動療法を学び、障害児教育・音楽のなかに取り入れる試みが、障害児をもつ親を中心に、音楽教育・障害児教育関係者が加わって、1998年5月より月例セミナーが野田燎の指導のもとになされている。本論では音楽運動療法の概要とセミナーの経過および参加者の事例から、当療法が成果を上げた自閉症児例と、音に対して非常に独特で積極的な感性をもつ事例を報告する。また、親・セラピストの同療法への評価について述べる。

(キーワード：音楽療法 音楽運動療法 障害児 自閉症児)

1. はじめに

自閉症であったドナ・ウィリアムズ¹⁾は、「わたしにとって、言葉は音楽から派生したものに思えた。音楽のメロディの中には、すでにことばが存在していた。」といい、テンプル・グラディン²⁾は、「話し言葉を持たないはずの自閉症児が、時々、話し言葉をメロディに乗せることがある。」と述べている。

音・音楽・言葉には私たち凡人が感じ取る以上の意味、謎があるのではなかろうか。自閉症の人たち、あるいは他の障害を持つ人のなかに、音や音楽に対して繊細な感受性をもっている人が多いし、言葉に対しても独特の感性を持っているように見える。

その謎が明らかになるにははるかに道は遠いが、自閉症児やほかの障害児が音楽が好きであることが多く、家庭においても、学校においても、親も教師も音楽を通した関わり方を学ぶこ

とが出来れば、より豊かな音・音楽・言葉の世界が広がることと思われる。

私たちは、音楽運動療法を学ぶことによって、障害児とともに音楽を楽しみ、お互いの成長をはかることを願って、98年5月より月1回の「旭川音楽運動療法セミナー」を開催し、野田燎の指導のもとに学習を続けてきた。本論では、その月例セミナーの経過と参加した障害児の変容と、親・関わり手の感想・評価を述べ、障害児や親、ピアニスト、セラピストにとっての音楽運動療法の意義を検討する。

98年11月16日より、セラピスト同志の月例学習会を持ち、セッション後の反省をさらに深めている。本論はそこで検討し収集した資料、文献、野田をはじめとする関係者からの資料を中心にまとめたものである。各事例は担当セラピストが記録を持ち寄り、また親からの記録を得て、全体を古川がまとめた。

2. 音楽運動療法について

音楽運動療法は野田 燎³⁾により提唱されている音楽療法の一つで、一口で言えば情動に働

* 北海道教育大学旭川校

** 旭川音楽運動療法学習会

*** 大阪芸術大学

きかける音楽による情動運動療法である。情動体験の積み重ねによって人間の生命力を増加させるとともに、人間の知的好奇心を誘発する。そこには人間と人間のかかわり方、そして一番大切な人間の意思、情感、意欲を発現させる心を生み出すことも含まれる。すなわら音楽運動療法は、精神機能や運動機能を司る中枢神経と末梢神経の両方を活性化し、身体変化を起こさせるものである。

音楽運動療法では、トランポリンを使う。トランポリンの上下運動は、身体のあらゆる部分を活性化させ、体力をつけるとともに意識を覚醒、集中させるのに有効だからである。

まず、生理学的には次のようなことが考えられる。

1. 心肺機能を増大させ、最大酸素摂取量を高める。
2. 心臓、血管系の働きを高め身体の血行をよくする。
3. 循環器系、筋系のほとんど全身に作用する。
4. 抗重力姿勢を保持するためにバランスをとる必要から、平衡覚、前庭覚が活性化される。
(姿勢反射)

5. 空間での位置確認のために眼球運動の正常化(前庭動眼反射)

6. 脳幹部の刺激による覚醒と意識集中促進。

これらは全ての視覚、聴覚、触覚等の感覚器系の統合によって脳が機能しなければならない状態におかれた際に発生する変化であり、これらの生理学的影響は、以下で示すように身体変化として表出する。

1. 手や腕の拘縮が重力によって下に垂れるため、手が伸びる。
2. 舌や口が動き、ヨダレも出る。
3. 発声が起こる。
4. 首が坐る。
5. 眼振が改まり、視線が安定する。
6. バランスよく飛べる(運動能力増大)
7. 笑う。

8. 手が動き出す。
9. 動きの変化を喜ぶ。
10. 表情が豊かになる。
11. 意思表示ができる。
12. 外界の変化に注意し始める(意識の集中化)。
13. 身体の筋肉がつく。持続力が増す。
14. 反応速度、認知速度が早まる。

バランスを保つために身体が動き出すというたったそれだけのことが治癒の起爆装置になる。その結果、眼振が治まり視線が安定する。外界に興味を持ち意識集中が起こる。運動能力が高まり、バランスよく飛べるようになり、手も動かそうとする。飛び方に変化が生まれ、それを楽しむ。喜びの表情をはじめとする表情の変化が現われる。視線が合い、意思がはっきりと他者に伝達される。長時間でも飛びたいといった意欲があることも他者にもわかる。体力と持久力が養われるにつれて、意識集中も長時間可能になる。それが五感の鋭角化を誘い、認知速度も早くなり、より意思や意図の発現が早められる。

3. 旭川音楽運動療法セミナー

旭川は音楽の町として音楽活動が盛んで、その一つ「ジャズ・マンス・イン・旭川(JMIA:代表村田和子)」は96年5月、活動の一環として「情緒障害児のための音楽教室」を開催し、その趣旨を引きついで、96年11月より障害児の音楽教室「スモール・ワールド」が隔月に開催されている。さらにJMIAの活動の流れのなかで、97年11月、野田 燎による音楽運動療法講演会が、また98年4月4・5日に2日間の同講習会が開催された。それを契機として旭川音楽運動療法連絡会が作られ、5月より月1回の音楽運動療法セミナーが開催され、99年1月で8回を数える。

開催日と参加者数は表1のとおりである。

セミナーのクライアントは、障害児と高齢者で、1回のセッションは30分である。

障害児の場合は、導入から展開・終結へと一人一人の状態に合わせて、臨機応変に対応する。

セミナー日ごとに反省会を開きクライアントの状態理解、関わり手のあり方についての指導がなされ検討が加えられる。

表1 参加者数

	1998年 月日	クライアント			セラピ スト
		総数	内障 害児	内児 閉児	
講習 会	4 / 4	10	6	(3)	—
	4 / 5	16	11	(6)	—
月例	5 / 10	8	5	(4)	14
	6 / 7	8	5	(4)	9
セミ ナー	7 / 26	9	6	(5)	13
	9 / 5	10	7	(5)	10
ナー	9 / 27	10	6	(4)	6
	10 / 25	9	7	(6)	10
	11 / 22	9	8	(6)	11
	1 / 17	10	8	(6)	10

注) セラピスト：道内ピアニストと介助セラピスト希望者。

10月までは、毎回、野田とスタッフのピアニスト・セラピストの指導を得ていた。11月セミナー以降、地元スタッフのみで野田の指導のもとに実施することとした。音楽スタッフを中心に入念な打ち合わせを行った。セラピスト3名（チーフ1名、サブ2名）、ピアニスト2名のチームを作り、クライアント一人一人に対してローテーションを組んだ。チームを組むに当たり、ピアニストのレパートリー、クライアントの好みの曲、セラピストの援助の仕方などに留意した。

11月セミナーは予想よりもスムーズな流れを作ることが出来たが、その背景には、半年間、苦労をともにした仲間同士でお互いの気心が分

かっている点が考えられた。

また、旭川セミナーの特徴は、音楽運動療法を受けているクライアントの親がピアニストとして、あるいはセラピストとして、親子で参加している点である。また、父親からも庶務の仕事において非常に大きな援助があり、この点もまた、意義深い。

なお、「療法」の用語には、病気を癒す、医療的な意味があるが、私たちは親であったり教育関係者であるので、障害児にとっての音楽運動療法は「喜びを音楽とともに」することを通して、楽しみ、安らぎ、癒し、育つものであることに留意したい。

4. 事例

(1) K. T. 君

セラピスト音楽担当、寺田真澄

昭和63年10月生まれ（10歳）

（診断名）微細脳損傷症候群 自閉傾向

2歳9ヶ月 旭川医大

（所属）陵雲小学校、向陵小学校情緒学級通級

（言語）基本的な日常会話は成立、自分の意志はおおまかに言語で伝えられる

（生育歴）

1歳半、指さしをしない、人と目を合わせない、関わりを拒否する、言葉が出ない（1歳半健診でチェック）。2歳で再度チェック。2歳5ヶ月保健婦自宅訪問。

2歳9ヶ月、最寄りの小児科医の紹介で旭川医大へ（脳波、CTスキャン）

H4年6月（3歳7ヶ月）みどり学園入園

H5年4月 百華幼稚園入園（みどり学園と併用）

H6年3月 みどり学園退園

H6年4月 わかば教室入室

H7年4月 小学校入学

（音楽）

・特別興味があるとは思えないし、嫌いでもないといった風の幼児期

・給食時、校内放送で、音楽が流れるといやが

ってスイッチを切りたがる

- ・盆踊りの太鼓の音が「こわいの」という
- ・家ではよく歌を歌っている。自分の好きなCDをかけ、歌詞カードを見て歌う
- ・学校の音楽でピアノ、リコーダーは階名を書いてやると、演奏する（簡単な曲）
- ・スモールワールドでは、楽器にさわるのを楽しみにしている

（音楽運動療法）

- ・毎例会に参加。野田先生と“遊ぶ”という感覚で、療法日をとても楽しみにしている。「野田先生、遊ぼう」と声をかける。

反面、野田先生のいない自主研修療法では、周囲の大人に付き合っているといった感じで、つまらない様子。

- ・音楽の選択がはっきりしている。リクエストしたり、自分に対して働きかけが強い曲（鉄腕アトム）は拒否する。
- ・サクソフットを吹きたがる。音が出たら満足。
- ・トランポリンの上で、大縄跳びを連続 50 回程、できるようなる。

☆特記事項

○ 4月（初療法）

- ・療法日の翌日の始業式にて、6年生の兄がK. T. がどこにいるのか分からないほど静かだったという。例年、この時期は極度の緊張と混乱があるが、一週間、嘘のように穏やか。

○ 6月例会 一人称の確立

- ・療法中、自分の思うようにならない場面で、

表1 人称表現について

書き言葉での自己表現（本人の日記より）	話し言葉での自己表現
1年生 10月（7歳） 日記付けスタート「K（自分の名）」	6歳 「K」
2年生 3月～3年生 5月	8歳 時々「ぼく」、大方「K」
「K」と「ぼく」が入り交じる	3年生 冬（9歳）「T（姓）」のみで
3年生 6月（8歳） 「ぼく」に定着	「K」と「ぼく」は全く使わなくなった
	4年生 6月（9歳） 療法後「ぼく」に定着

当日気がかりだった事（翌週の時間割が手元に届いていない）を思いだし、混乱、野田先生がサクソフットを吹かせてくれて落ち着く

- ・その後、トランポリンの上で「痛い」「ごめん」「ぼく」の三語によるやりとりを4分間続ける。

・療法後、野田先生は関係付け上、とても意味のある療法だったことを力説する。

- ・当時、こだわりを持って、自分のことを「T（姓名）」と言っていたが、この療法日を機になくなり「ぼく」という。

（表1）

（音楽担当） 寺田真澄

[実力] 子どもの頃、数年間ピアノを習っていた程度。ソナタアルバムIの途中までしか履修していない。

[動機] 子どもの療法によく使われる曲（貴婦人の乗馬）は昔習ったことがあり、セラピスト（スタッフ）の方に「やってみたら」と勧められたこと。

[経過]

・7月例会ではじめてK. T. の音楽担当（13分）。以降、私にピアノを弾く意志がなくとも、野田先生がK. T. に「誰にピアノを弾いてもらう」と聞く。K. T. は決まって「お母さん」と答える。

・K. T. のリクエストした曲が弾けなくて、すぐ交替。動きに合わせられず交替。反省会の席で、“お母さんがピアノを弾くことで、子供の許容範囲が広がるとも意味のあること”と野田先生は話して下さる。

・自宅での練習を重ね、療法を試みるが、技術
・センス・度胸のいずれも持たない私には、とうてい無理なことと思われる。他の音楽の方達のプロ意識を強く感じ、真似事なら邪悪とさえ感じる。

・10月例会の反省の席、相変わらず私にエールを送って下さる野田先生に、「先生の著書の中に音楽を担当するのはプロの人と書いてありますよ。」と問う私。「一曲だけのプロという考えもある。」と答える先生。“もう、やるしかないか！！”

・11月例会、30分間の療法を一人で引き続けることができる。

自画自賛、感激、感謝（K. T. に、野田先生に、五十嵐先生に、西崎先生に、青野先生に、酷評を下ろしつつ見守ってくれた夫に。）

[考察]

○当初、我が子の音楽を担当するのは、双方に親子の甘えが出て、マイナスでは、と危惧したが、クライアントと音楽担当者間に信頼感がある事、共感できる部分がある事等のメリットがあるのか。

○11月例会を振り返ってみると、

・療法の流れをみる余裕が多少なりともあった。裏付けとして、

①練習を重ねた曲。

②予定した曲目が療法の流れになんとか合った。結果として、

①子供の気持ちがわかる場面がある。

②ピアノを弾いて、K. T. と同じストレスを感じたり、つられて笑う。

③ピアノを弾きながら、心の中でK. T. に話しかける。

・何回も言っているのにわかってくれないね

・野田先生、何しているのかな。

・待って、今、野田先生、きっと楽しいことしてくれるよ。

・そんなにおかしいの、お母さんも笑ってしまって、ピアノまちがえちゃうよ。

[課題]

・K. T. に対して新しい曲を用意すること
・他の子供のリズムには、まだまだ合わせられない。

☆クライアントの自主性を養うこの療法で、私自身もピアノに対する自主性を養っていただいています。

(2) Y. O. ちゃん、小学校3年女子

西崎広美

3歳6月時、自閉的傾向の診断。

4月4日5日の講習以来、毎月のセミナーに楽しんで参加。7月より月2回、9月より毎週西崎のもとに通う。

8月には「(西崎)先生好き」と言ってくれたようで、レッスンにも積極的に参加。当初、字を書くことにこだわっていたが9月に入ってほとんど字を書くことがなくなった。

10月27日、歌を歌って自分が出している音とピアノの音が違うと(違う調で弾くと)、「違うよ、私の音で弾いて」という風に態度で示す。

【母の記録 1998年11月22日】

今回の音楽運動療法が一番、子供の変化を見ることが出来たと感じます。

ボールのキャッチがあれ程長く続けることが出来たのも初めてですし、こちらが送ったサインを見て自分も返してくるようになりました。普段は一拍おいてから仕方なく返して来るという感じでしたが、まわりが見え始めて本人にも余裕が出てきたのかなと思われます。

荻野さんの手の動きに合わせて真似を続けたりすることだって、いつもは一緒に真似していても途中で疲れるのか、あきめるのか急にプイッという感じで止めてしまいました。

最初療法を受け始めた頃は、Yの気持ちの解放やストレス発散できたらいいな位にしか思っていないませんでした。だんだん回数を重ねるごとに反応が早くなってきたなど近頃思っていたのです。

以前は、しばらくしてから反応するか、知らん顔を決め込んでいたのですが、前向きにしかも、ごくたまにですが自発的に反応してきます。

西崎先生のところへレッスンに行くようになってから変化が目立ってきたように思います。第1に西崎先生が好きになったことがあげられると思います。今までYに人を好きという感情があまりなくて、好き=食べ物という感覚が大部分を占めていました。好き=人物という事でもよく他人にも目が向いてきたと思います。

歌は元々好きで言葉がでない内にハミングで歌い出し、1歳8ヶ月に突然チューリップの歌をハミングし出したときは驚きました。次にめだかの学校、ちょうちょうだったので、ちょうちょうの途中で途切れてしまいました。

お歌大好きという本が全4巻あるのですがそのうちの3冊は買ってテープを聴きながら一緒に歌ったりしました。1冊につきだいたい60曲ぐらい入っていてほとんどページを開くと歌うことが出来ました。

言葉自体が出てこないのも、本の題名で伝えたり、歌で伝えたりとメッセージの役割を果たしていました。

歌うことによっていくらか言葉も出てきました。いつも歌っていることが多かったのも、Yちゃん=歌が好きと皆に覚えられていました。

学校に入学したての頃は、心の安定をはかるためか歌い出しまわりをおどろかせていたようです。

だんだん歌わなくなっていくのまにか歌を忘れたカナリアに成ってしまいました。

(3) Y. T. 君 高等養護学校1年男子

青野 栄

1) Y T君と出会うまで

7月下旬、突然(私にしてみると)Y T君のお母さんから電話があり、ボールを買ったので夏休みに、家(自宅)の方に来て欲しいと言われて、正直、私に何が出来るのだろうと頭の中が「不安」という文字で一杯になりました。Y T

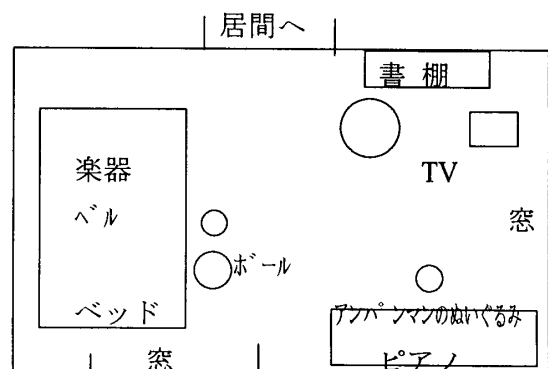
君を知ったのは4月、彼も私も初めて音楽運動療法に参加したときでした。ほとんどの子ども達が嬉しそうにトランポリンを飛ぶ様子を丸2日、見学した中で彼だけが会場内に入ることが出来ないほどひどく緊張して歩き回っていました。唯一彼のお母さんだけが本当に温かい瞳で彼を落ち着かせようとしていた様子が、とても印象的でした。2度目に会ったのは7月の療法の時でした。夏休みで帰省してきたばかりの彼は、そこでも会場の中にはいることが出来ず、表情も硬いままでした。私自身も4月から毎月参加見学していたにもかかわらず、この音楽運動療法なるものをほとんど理解できずにいました。

ですからこのお話を引き受けるに当たっては、夏休みの短期体験で(友達になるには年齢が違いすぎ)せめて顔くらい覚えてもらいたい、知り合いくらいになりましょうということを目指し、8月1日から計5回、彼に会いに出掛けることにしました。

2) Y. T. 君と出会うまで

①第1回 8月1日(土) 10:00

とりあえずいつも私自身が自宅で使用している打楽器やメロディベル、楽譜などを持って出掛けました。レッスン計画などは全く白紙、彼がどんな反応をするかも予想もつかず、とにかく行ってみよう、何かやってみようといった心境でした。天気の良い日で日当たりの良い部屋にはピアノ、ベッド、<図1>テレビ、ビデオと何でも揃っていました。何より驚いたのは彼の顔が私の知っている表情と全く違っていたこ



とでした。まだ幼さの残るあどけない表情で、療法のときに見せた堅い不安な様子とは全く別人のようです。それでも私が部屋に入り、持参した楽器類をベッドに置くと「何してんだ」といったげなそぶりで家中をグルグルと歩き回りました。とにかくついてゆき音を一緒に出し、私という存在を覚えてもらおう。それだけでした。

②第2回 8月3日(月) 10:00

2日後に来た私をちらっと見て「また来たのか……」といった表情で出迎えてくれた彼。私を嫌がっているのか歓迎していているのかは、まだ表情から見抜くことはできませんでした。前回と同様、彼のベッドの上に楽器を出しても、彼は居間に座ったまま動きません。どうも私の様子を伺っているようなので、前回最後に弾いた「貴婦人の乗馬」を一人で弾いていると、飛ぶように部屋に入り、ボールに座り、大きく跳ね始めました。顔も上向きで、時折笑顔も見られます。前回のことを覚えていたのかな?とも思われましたが、とにかく心地よさそうにボールに座る彼の表情が印象的でした。

一休みして居間のソファでお気に入りの曲を聞く。彼の隣に何気なく座りました。一瞬堅い表情を作りましたが、私も知らんぷりをしてお母さんと話していましたら、出ていくことはありませんでした。でも手がほんの少し触れただけで驚いて払いのけられてしまいました。

その後、お気に入りのホルンの音に合わせて(低音でオクターブ)ピアノを弾くと、貴婦人の乗馬とは違い、どことなく落ち着いた様子でボールに座りました。曲に違いをよく耳で聞いているのか、謎と発見の2日目でした。

③第3日 8月8日 10:00

前回から丸4日空いていたので、彼の記憶がどうなっているか少々不安でしたが、私自身は今日はどんな顔を見せてくれるのか、楽しみでもありました。私に来るまで、自分でピアノを弾いていたとお母さんから報告を聞きながら、会話していると、彼が部屋に入ってきて、ピ

アノを弾き始めました。中音の一オクターブあたりでトリルのように2、3の指で黒鍵を弾くパターンとアルペジオのように鍵盤全部を使って弾くパターンを交互に繰り返していました。一人で弾いているときは1時間でも弾いていることがあるそうです。いつも聴いているカセットもジャズもあれば童謡もあるという具合で、全くジャンルにこだわらないようです。彼がピアノを弾いている間、いろんな楽器を合わせましたが、これらの音にはほとんど反応は無く、自分のピアノに集中しているのか嫌がるわけでもなく喜ぶわけでもないといった様子でした。3回目となった「貴婦人の乗馬」は彼にはボールではねる曲という意識が身に付いたようですが、どうも気分が高揚しすぎてしまうようで、持続性が薄れてきました。その後は高音を避けて、中音に統一して曲を色々と変えてみました。どうやら彼の中ではメロディも大切だが、その時の気持ちと、ピアノの音の高低がとても深く関係しているのかなという気がしました。そこで「おおスザンナ」という易しくてだれも耳にしたことのある曲で高さ、調、テンポを変化させてみました。ゆっくりと弾いてみるとあくびをしたり、くつろいだ表情をしますが、テンポを上げ、高音になると表情がパッと明るくなったり、高ぶったりしました。

この日は、私にどうやら恐怖心や不安、不信感が無くなったようで、顔を近づけても嫌がらなくなりました。

④第4回 8月11日(火) 10:00

今回はボールに乗る→休憩→ピアノを弾く→お菓子を食ベるといった流れを自分でリードしてコントロールしていたようです。今回は「貴婦人の乗馬」を弾きませんでした。彼が自分でどんな曲でも乗り方、はね方をコントロールしていたようです。満足だったのか、ボールのあと、休憩し、ジュースを飲んでからも、いつもならこちらの様子を伺いながら、しばらくして戻ってくるのですが、休憩後、実にニコニコした表情ですぐに部屋に入ってきました。

彼が自分でピアノを引き始めましたので私も一緒に座り、一緒に即興演奏をしました。メロディを合わせてみたり、私は私で勝手に弾いたりしながら反応を見ました。どうやら私の音も聞いているらしく、一緒に合わせたり、リズムを取ると嫌がらず、しばらく一緒に演奏しました。私の音や存在はイヤではないようです。それが最もよく分かったのは、お菓子を食べていたとき、向かい側のテーブルで一緒に食べている私と足がぶつかっても平気で、ずっと私の足の上に自分の足を重ねてお菓子を食べていたと言うことです。一番はじめの目標「知り合いになろう」が達成されたかなと思った出来事でした。

音に関しては、2回目に低音部でだしたおもちゃのホルンの音が今回はあまり心を落ち着かせることが出来ず、逆にその音のおもちゃを持ってはね回り、居間へ飛び出すと入った様子でした。毎回、心地よい音は違うんだということを改めて感じた一日でした。

⑤第5回 8月14日(金) 10:00

今回で夏休みは最終回ということもあってか、お父さんがビデオを用意していました。いつものように私はベッドに楽器をおき準備していましたが、彼の様子がいつもと違い、目に落ち着きがなくどうしたらいいものかと悩んでいるようでした。どうやらお父さんの存在がとても気になるようです。本来一番信頼しているはずのお父さんが入っただけでこんなに違うのなら、音楽療法で沢山の知らないの中に入ることがどんなにか大変なことだったのかと感じました。

結局この日は、ピアノもボールも長続きせず彼は終始3人の大人の顔を見比べて、様子を伺ってついには外に出てしまいました。

3) 私と音楽運動療法との関わり

音楽というものを仕事にして10年以上になりました。5歳から姉と一緒にピアノを習っていた私はその中で1度もピアノを教える人になろうと考えたことはありませんでした。ただ弾くことが好きでピアノに触れていた私に、ある

日4人の4歳児が待っているの……と頼まれたことが最初でした。

その後、いろいろな障害を持った子ども達がレッスンに通ってくるようになりましたが、お母さん方の希望もあり、障害ということを意識せず、個性のひとつとして普通の子ども達と同じように接してきました。

数年前の秋、自閉傾向のある少年と出会って、次々と情緒に何らかの問題のある子供達のレッスンが始まっていくとさすがに個性だけでは解決できない大きな山に当たってしまいました。学校を訪問して先生やお母さん方と話しをし、色々なことを教えてもらっているところにこの療法のことを知りました。トランポリンと音楽がどれだけ密接に関わっているのか全く分からないまま、午前10時から午後7時過ぎまで、丸2日間、私は始めから終わりまで1度も席を立たず、とにかく見ていました。なぜだか席を立つことが出来ませんでした。色々な講習会に参加しましたが、こんなことは初めてです。2日目の講習会で、突然ピアノを弾くことになり、野田先生に怒られながらも帰る気持ちにはなりませんでした。そのまま毎月療法に参加していますが、今もなお理解しない分からないままの私がいます。誰よりも私自身が自分の音を聞かずに音を出し続けていたのだと思います。音の持つ力と奥の深さを改めて感じた半年でした。

【母の手記】

T. T.

Yが音楽運動療法に初めて参加したときは、数日後に高等部の入学式をひかえ、Yも丁度、新しい場所や人の多いところは、とてもいやがり、短い時間の中では、なかなか難しい感じでした。それでも、夏休みの帰省中、家庭の中でも取り組むことは出来ないだろうかと思い、青野先生に話して、家に来てもらえる様になりました。

10時から12時までを5回行いました。1回目から5回目までの間に、Yの気持ちのようなものが見えてきました。

その日その日によって、Yの気持ちの良い音が変わることが分かりました。同じ曲でも、ピアノの中心あたりの音だったり、高い音、低い音だったりします。つまり、今日はこの辺かな？という音合わせ、音見合いの時間が必要です。Yのその日の気持ちの状態によって、キーの高さもずいぶん変わるようです。

ボールに座って跳んでいる時に、キーを少し上げて曲を弾いただけでも、Yにとって2オクターブぐらい音を高くした感じになり、ボールに座って跳んでいる早さもだんだん早くなり、それにつれ気持ちもだんだん興奮していき、ハイになりすぎて、不快になるという感じでした。もともと音に敏感な子でした。

野田先生のお話では、音楽を合わせるのが難しい子の場合、ほんの少しキーを上げたつもりでも、一気にダーッと興奮してしまうので、逆にキーを下げて、音を少しおさえていく方が良いと話されていました。

初めの頃は、ボールに座って跳ぶと、気持ちがすぐにハイになり、そのまま部屋を出ていき、だんだん気持ちが落ち着いてきて、戻ってくるという感じでした。あまり他の部屋に行く回数が多いので、野田先生が話していたことを思いだし、ひざをおさえて、ボールのはねるのを小さくし、リズムをゆっくりすると、だんだん落ち着いてきて、しばらくはゆっくりと跳び、少しずつ押さえるのをゆるめていき、だんだん速くなり、それを何回かくりかえしているうちに、だんだん、自分で速さをコントロールできるようになってきて、長くボールに座って跳んでいられるようになりました。

4回目頃になると、ボールに座って跳びながら速さをコントロール出来るようになり、部屋を出ていく回数もへり、部屋の中で落ち着いて自分から遊ぶようになりました。

一度、部屋を出ていき、戻ってきて、中に入らないでドアを閉めてしまいました。こちらはドアのそばにいるのを感じ、そのまま曲を弾いていると、ドアの取っ手をリズムに合わせて動

かしていました。そこでピアノのリズムを変えると、ドアの取っ手のリズムも変わり、今度はYがリズムを変え、ピアノが合わすという感じでした。又、ピアノが自分の持っているカスタネットの音に合わせていることに気づいて、Yがリズムを変えたこともあり、音を通して人とかかわりをしているのを感じました。

5回目も初めからリズムにのって取り組んでいましたが、途中でお父さんが帰ってきて顔を出したときから、Yのリズムが変わりました。それまでは目尻を下げていたのに、目つきがきつくなり、一瞬のうちに3人の顔を見るといった、少しの環境の変化を敏感に感じ取ることに驚きました。なぜなら、Yにとって大好きなお父さんだからです。

5. 考察

(1) K. T. 君の例では雑音的音楽には強い拒否があるものの、音楽は大好きで、いい演奏とそうでない場合にも敏感である。いい演奏をしてくれる人は大好きである。決して人が苦手というわけではない。音楽を通して人の世界を広げている。

特筆に値すると思われることは、6月例会の野田とのやりとり以来、「ぼく」の1人称を話し言葉のなかで定着させたことである。自閉症児にとって1人称を獲得することは最も大きな課題の一つである。

自分を主人公として認めてくれる集団の中で、音楽とトランポリンという抗重力運動を楽しむ活動は、1人称である「私、ぼく」という自意識を感じさせる働きがあるのではなかろうか。

1人称の定着は社会性の広がり大きな一歩である。

(2) Y. O. ちゃんの例では、もともと歌が好きだったのに、学校に入ってから歌わなくなったようで、歌を楽しめない現代の学校が見える。音楽運動療法を通して、本来の音楽好きを回復しているようである。また、西崎先生のレッスンの最初の日に、自由にさせてくれ、受け

入れてくれたことで先生が好きになったと母は思っている。好きな音楽を好きな先生とともにして、レッスンをとおしても社会性の広がりが見られる。

11月例会では、ボールの受け渡しが非常にうまくなっており、社会性・対人関係の広がりが見られている。

音楽は人と人をつなぐ媒体でもある。人よりも音楽が好き、音楽を共有してくれるのは人、音楽を通して人が好きになっている。K. T君、Y. O. ちゃんの事例は、音楽がコミュニケーションであることを如実に示している。

(3) 音、音楽に対する感受性についてみると、Y. T. 君は感受性が非常に高い。少しキーを高くするだけで2オクターブくらい気持ちがハイになる、膝を押さえてボールのはねを小さくすると落ち着いてくる、というお母さんの観察に、繊細にして敏感に音に反応する姿が示されている。

また、Y. O. ちゃんも調性の違いを見極め、自分の音を求めている。

K. T. 君もいい音楽に敏感である。

(4) 音楽運動療法ではトランポリンが必須の備品である。が、上下運動のためにはより簡単な方法として、ゴムボールがある。大きなゴムボールに乗り、腰掛けてジャンプすることで、抗重力上下運動を獲得できる。Y. T. 君はボールの上下運動を音楽とともに楽しんでいる。

荻野のボールエクササイズ⁴⁾においても、長谷川らの乗馬⁵⁾においても、抗重力運動が一つの意味を持っているように思われる。

(5) セラピスト（介助者）とピアニストに求められることの一つは、子ども、障害児とともにいて、ともに感じあえて、楽しみあえて、認めあえて、動きあい、音を楽しみあうことができ、子どもを主体において、見守り、待ち、時に応じて積極的にもなれる介助的かかわりである。

もう一つは、音楽を、子どもにあわせて、好きな曲、リズム、拍子、キーを合わせ、メッセ

ージ性の豊かな演奏を送る音楽的かかわりである。さらに次のことにかかわり手の感覚を育てる必要性が感じられた。

①子どもの音の高さに対する敏感度。

②曲の調性の意味と対応

③長調と短調の違い

④和音づけの違いによる曲のニュアンスの変化

自閉性障害が重くなり、人の存在に敏感であればあるほど、見知らぬ人という雑音を少なくし、いわゆるより構造化された、物理的・人的環境が用意されなければならない。音楽運動療法においてもその環境が求められており、セラピストが十分に留意すべきところである。

(6) 音楽運動療法の一番いいところは、集団の中であって、自分が主人公であること。自分が楽しみ喜ぶことができること。そのことを皆が支えてくれること。その時間と場所が確保される点にある。

(7) 現代の子ども社会は管理的強制的環境の中で、非常に緊張度の高い状況におかれているように思える。いわゆる普通の子ども達も、登校拒否、いじめ現象をとおして悲鳴を上げている。

セミナーを通して、私たちはいわゆる障害児の非常に敏感な感受性を感じとることができた。まず、人の存在そのものに、また、物理的・空間的・視覚的・聴覚的・音楽的・刺激等に対して。

こういった感受性の持ち主が、普通の子どもでさえ悲鳴を上げる環境におかれたなら、恐ろしい緊張状態に置かれるであろうことは、さすがの凡人でも想像できる。

想像は出来るが、感じ取る感性をもつことにはさらに大きな努力がいる。

もしそうであるなら、緊張を解き、本当に楽しめる場面を意図的に用意する必要があるのではないか。さもないと緊張のバランスが崩れかねない。

一方で、私たちは「好きなことをできるだけ自由にさせる」ことの弊害もまた、これまでの

自閉症児療育の中で学んでいる。

障害児あるいは自閉症児にとって必要な枠づくり（構造化）と本当に楽しめる場面づくり、および私たち凡人の感受性の向上が求められる。

文献

- 1) ドナ・ウィリアムズ(1993)：自閉症であった私、新潮社
- 2) テンプル・グラディン(1994)：我、自閉症に生まれて、カニンガム久子訳、学習研究社

3) 野田 燎(1995)：芸術と科学の出会いー音楽運動療法の理論と実践、医学書院

4) 荻野ひとみ(1999)：障害児がボールエクササイズと出会った、情緒障害教育研究紀要 第18号、195-200

5) 長谷川康弘・榊澤美紀・榊澤良和・小野寺由香・古川宇一(1999)：旭川市における障害者の乗馬ー旭川アルム作業所の乗馬活動を通して障害者は何を得たか、情緒障害教育研究紀要第18号、183-194